

学生支援の現場から

◆石川工業高等専門学校
ボランティア活動と学生支援

伊藤 文雄
(石川工業高等専門学校 学生課長)

平成一九年三月二五日能登半島で震度六強を記録する地震が発生し、輪島市、穴水町など能登半島各地の市や町では大きな被害を受けました。石川高専では被災地域に最も近い高等教育機関として、建築学科及び環境都市工学科の教員が建物の被害状況調査や法面崩壊、液状化などの災害調査を急ぎ行なうなかで、復興支援活動への協力意識が高まってきました。

こうしたなかで、四月八日(日)、輪島市門前町に学生二一名、教職員六名がボランティアとして参加することになりました。被災地への交通手段は石川高専のバスを、また、作業に必要な機材は県との連絡にあたった建築学科教員が準備するなど、学校として取り組みました。一日だけの作業でしたが、学生達は倒壊したブロック塀の撤去作業などを行い、ボランティアに参加する意義を学びました。



建築学科学生による被災地家屋被害状況調査

ランティアの基礎知識や有用性を学んできています。

地震から一年を迎えた今年三月二五日、ボランティア募金箱が設置されました。ボランティア活動を行う学生への経済的支援と、地震を忘れることのないようにとの思いを含め本校の技術職員が製作しました。本校では今後もボランティア教育、活動の支援に取り組みながら学生支援の充実を図っていくと考えています。

きました。

このようななかで、文部科学省の「学生支援G P」に本校の「学外連携活動による人間力向上教育システム」が採用されたことにより、ボランティアに関する本格的な教育が開始されました。本校の学生は学生支援G Pの教育計画に基づきボ



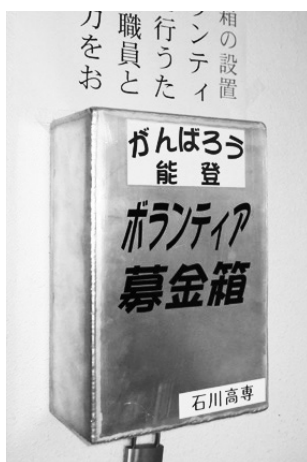
ボランティア参加学生及び教職員

その後、四月二七日(金)に建築学科五年生が穴水町で、また、五月十四日(月)には建築学科四年生が輪島市門前町で、それぞれ教員の指導のもとに家屋の被害状況調査を実施しました。学生課ではこれらの活動が円滑にできるよう、学生支援の一環として授業の調整やバス、昼食、医薬品などの手配を行いました。

その後も教員や学生の自主的なボランティア活動が報告されるなど、ボランティア活動に対する認識が高まるなか、一方で、ボランティア活動は単に気持ちだけで出来るものではなく、学生が最低限学んでおくべきルールや基礎知識など、ボランティアに対する教育の必要性が指摘され、ボランティア活動に詳しい外部有識者の助言や指導を交えた教育の検討などが議論されてい



学外連携活動による人間力向上教育システム(学生支援G P)における講義風景



ボランティア募金箱